

岩手医科大学報

Iwate Medical University News

2013・3 vol.438

●発行者—理事長・学長 小川 彰 ●題字—大堀 勉



夕闇に立つ矢巾キャンパス 〈写真撮影：医学部3年廣瀬仁樹さん 関連記事：P6〉

おもな内容

- 特 集 岩手医科大学総合移転整備計画附属病院移転事業について
企画部長・事業推進部長 遠藤 厚
- トピックス WHO（世界保健機関）主催「災害後の保健セクター復興国際会議」が
矢巾キャンパスで開催されました
- 表彰の栄誉 附属花巻温泉病院が「花巻市活力あるまちづくり表彰2012」を受賞しました
- フリーページ すこやかスポット医学講座No45 「当科の顔面の痛み治療について」
麻酔学講座 講師 水間 謙三

特集

岩手医科大学総合移転整備計画 附属病院移転事業について



企画部長・事業推進部長 遠藤 厚

本学総合移転整備計画は内丸地区における建物の老朽化かつ敷地の狭隘化と交通渋滞解消に向け、平成13年より矢巾地区への移転整備を進めて参りました。この間、平成18年には第一次事業として、薬学部新設と教養課程の移転が完了、平成23年には第二次事業として、臨床課程を除く医・歯学部学生及び基礎・共同研究部門の移転が完了し、医・歯・薬三学部が連携した医療系総合大学として、新生岩手医科大学がスタートしております。

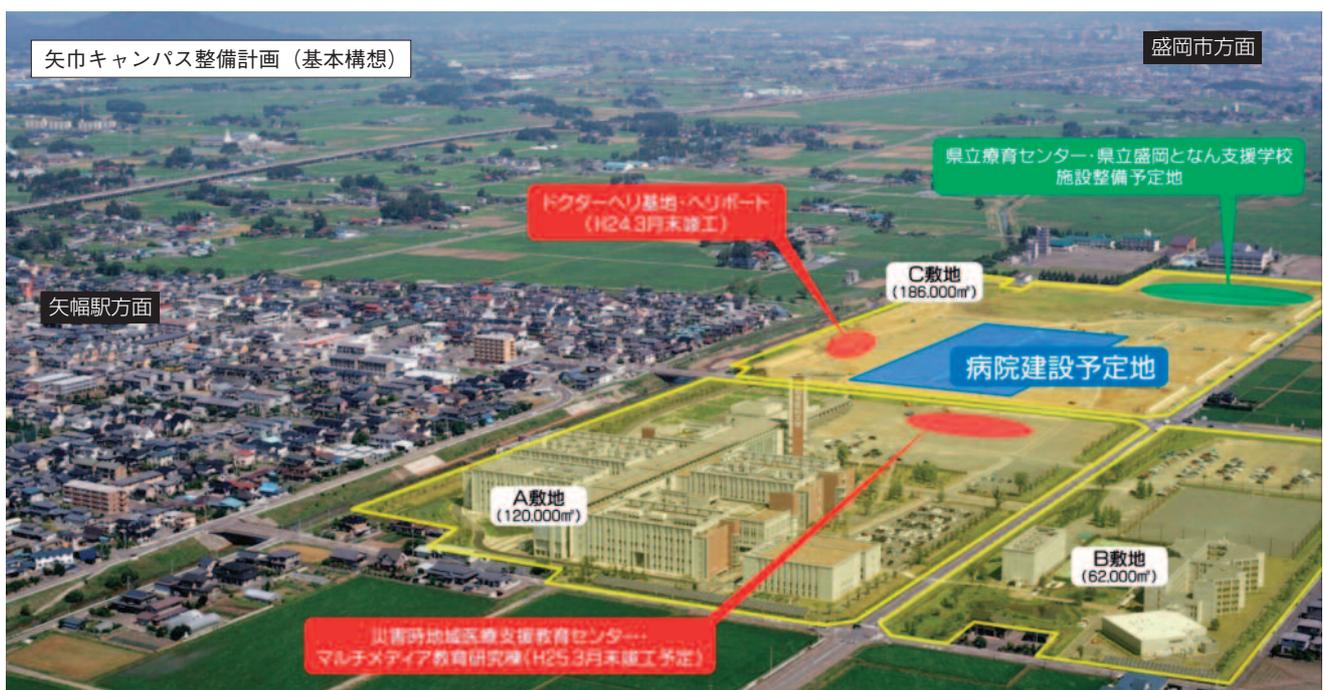
現在、総合移転整備計画の総仕上げとなる「附属病院移転事業」及び内丸地区の再開発を含む「内丸メディカルセンター（仮称）整備事業」の早期実現に向け、学内協議を進めていますので、現時点における基本的な計画の内容についてご報告いたします。

矢巾地区について

平成30年度内の開院を目指し、矢巾地区に移転新築する附属病院は、特定機能病院として病床数1,000床の病院を整備します。延床面積は8万5千～10万㎡、階高12階～13階建を想定。新病院では、診療科を臓器別・疾患別にセンター化し、より効率的な運用を行う計画とし、また、医師不足により本県が問題として抱えている小児・周産期・救急医療については「統合医療センター（仮称）」としてエリア統合・機能拡充を図り、既に整備済みのドクターヘリとも連携を取りながら一体的かつ効率的な運用が出来る体制を整えます。

土地利用計画では5万6千坪の広大な敷地の中で、新病院を中心として商業・サプライ・サービス・居住ゾーンを各エリアで区分し、将来的な増築・建替えを念頭においた配置計画とし、併せて、道路拡幅や街並み整備、高速道路からのアクセス環境整備等も含めて、行政とも連携を取りながら地域の活性化も視野に入れた計画として検討を進めています。また、岩手県からの要請を受けて県立療育センター及び県立盛岡となん支援学校の建物を敷地北側に整備することも決定しており、今後、県とも連携を取りながら整備を進めていく計画としています。

今回の移転を機に、新病院では、ハード・ソフトの両面から機能の効率化とシステムのスリム化を図るとともに、常に進化する医療を見据え、より高度な手術や診療にも柔軟に対応できる医療環境を整備することが絶対要件となります。また、患者集客及び外来診療を強化した内丸メディカルセンターと密に連携を取りながら、将来的に同エリアについては、新病院を中心に高度・特殊医療を提供する三次医療の拠点ゾーンとして形成していくことも視野に入れ、岩手県及び北東北の核となる病院として更なる高度医療提供体制の充実を目指すこととしています。



内丸地区について

内丸地区には、現附属循環器医療センターの建物と歯学部エリアを活用し、歯科医療センターを併設した50床規模の「内丸メディカルセンター（仮称）」を整備します。内丸メディカルセンターでは、患者さんがアクセスしやすい内丸地区の利便性を最大限に活かし、高度な外来診療を行う環境を整備し、矢巾キャンパスの新病院との一体的運用を行います。また、PET・リニアック先端医療センターと連携し、がん外来化学療法や放射線治療などを含む外来で可能な高度医療を提供していく計画としています。

盛岡圏域における内丸メディカルセンターの位置付けは極めて重要なものであり、官公庁が隣接する盛岡地区の中心地としてだけでなく、盛岡市内及び盛岡以北の患者さんがアクセスしやすい窓口として外来機能の充実を図り、入院機能を持つ新病院との密な連携を取っていかなければなりません。また、現在の附属病院エリアでは1日に1万人以上が活動しており、これらの母体が矢巾に移行するとなると、中心市街地への影響も少なくはなく、将来的な附属病院跡地の再開発に当たっては、地域活性化の観点からも、県や市と連携を取りながら慎重に協議を進めていく必要があります。

これらを踏まえ、内丸メディカルセンターの整備要件として「新病院との連携」「高度な外来診療機能」そして「患者さんがアクセスしやすい魅力あるセンターづくり」を念頭に、今後の計画を進めていくこととしています。



今後の展望について

将来的に矢巾キャンパスの新病院については、県内だけでなく北東北を含めた三次医療拠点ゾーンの中核としての役割を担っていくことを視野に入れ、安定した高度・先端医療を提供する特定機能病院として、その機能を高めていかなければなりません。また、内丸地区については内丸メディカルセンター整備と並行し、病院跡地の再開発計画協議を進めていく必要がありますが、先述のとおり、附属病院跡地は盛岡市の中心部に位置し、非常に利便性の良い環境にあることから、再開発に当たっては、行政とも連携を取りながら、市街地の活性化も視野に含めた計画検討が必要となると考えています。

平成13年に「世紀の一大事業」として計画が始まってから10年が過ぎました。来年度には平成30年度の新病院完成に向けた設計作業が本格的にスタートします。双方の病院では岩手医大としての新たな特色を出し、各機能を最大限に発揮して、よりよい医療に結び付けていくことが重要です。そのためにも、移転時には現状をそのまま移転するのではなく、限られた人的・物的資源の中で、効率的かつ機能的な医療環境を確保できるよう、建物とシステムの全体的なスリム化を図り、より組織的な運用体制を構築していくことが必須と考えています。

今回の附属病院移転の完了をひとつの基軸とし、新生岩手医科大学が、建学の精神である「誠の人間の育成」「地域医療への貢献」の理念のもと、世界に冠たる大学として益々の発展を遂げることを期待します。全学が一致団結して事業を完成させるためにもみなさまのご協力をお願いいたします。

◆移転事業想定工程表

事業名称	平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度		平成29年度		平成30年度	
	4	6	8	10	12	2	4	6	8	10	12	2	4	6	8	10
矢巾地区	C敷地造成工事															
	規制変更協議 変更申請手続															
	第二工区 造成工事															
矢巾地区	完了 手続															
	附属病院 移転事業				基本構想				土地 利用計画				病院関連施設 先行工事			
					基本設計				実施設計				新病院/本体建設工事 (3年8ヶ月)			
内丸地区	内丸メディカルセ ンター整備事業															
					基本計画				基本設計				実施設計			
					基本計画				基本・実施設計				B棟機能移設 ・改修工事			
内丸地区	歯学部B棟移 設・解体工事															
					基本計画				基本・実施設計				B棟解 体工事			
実習室 移転																

最終講義が行われました

本年3月31日付をもって定年退職される薬学部所属教授の最終講義が、2月14日(木)矢巾キャンパス大堀記念講堂で、医学部所属教授の最終講義が2月26日(火)歯学部棟4階講堂で行われました。

講義には本学教職員をはじめ在学生や卒業生など多数の関係者が聴講しており、各教授によるスライドや在職中のエピソードなどを交えた熱心な講義に聴講者は名残惜しそうに耳を傾けていました。講義終了後には、小川学長から挨拶があり、各教授に職員や学生等から花束が贈呈され、惜しめない拍手が送られました。

「本郷から岩手の旅を終えて 分子、オルガネラ、細胞そして個体とともに」



二井 将光 教授
(機能生化学講座)

「有機合成化学とともに40年。薬学で始めて薬学に戻るまで」



畠中 稔 教授
(有機合成化学講座)

「岩手医科大学における薬理学最終講義」



中山 貢一 教授
(分子細胞薬理学講座)

「タマゴと教育」



西郡 秀夫 教授
(薬剤治療学講座)

「薬学教育と薬剤師業務」



高橋 勝雄 教授
(臨床薬剤学講座)

「肝不全の克服を目指して」



鈴木 一幸 教授
(内科学講座消化器・肝臓内科学分野)

「新設糖尿病代謝内科の9年間を振り返って」



佐藤 譲 教授
(内科学講座糖尿病・代謝内科分野)

「運動器今昔—整形から機能、そして健在へ—」



嶋村 正 教授
(整形外科科学講座)

平成24年度いわて高等教育コンソーシアム「From Pupil to Student～『習う』から『学び』への橋渡しについて～」が行われました

平成24年度いわて高等教育コンソーシアム・シンポジウムが、2月23日(土)にコンソーシアム構成大学等の他、岩手県内の中学校・高等学校の進路指導教諭等、岩手県教育委員会等約200名の参加のもと、本学矢巾キャンパスを会場として開催されました。

基調講演には花巻北高等学校長 鈴木 晃彦氏をお迎えし、高等学校の視点から捉えた岩手県の教育に対する提言が、各大学等からは、それぞれの大学等で行われているリメディアル教育*や初年次教育の紹介があり、「From Pupil to Student～『習う』から『学び』への橋渡しについて～」のテーマに基づき、パネルディスカッションが行われました。

教育現場で進路指導にあたる中学校・高等学校教諭と大学教員が一同に介し同一のテーマで討論する機会はこれまで行われてきておらず、今回のシンポジウムが岩手県の教育に一石を投じ、今後、発展的な議論が展開されることが期待されます。

*リメディアル教育とは、必要な基礎学力を補うための補習教育のこと



パネルディスカッションに参加した
高橋共通教育センター長

WHO (世界保健機関) 主催「災害後の保健セクター復興国際会議」が矢巾キャンパスで開催されました

3月5日(火)～6日(水)の二日間にわたり、WHO (世界保健機関) が主催する「災害後の保健セクター復興国際会議」が、岩手医科大学および東北大学医学部の共催の下、本学矢巾キャンパスで開催され、近年の大震災を経験した国 (中国、ニュージーランド、日本) を含む西太平洋地域15カ国から保健医療行政に従事している各国政府高官など70名以上が参加しました。

初日の3月5日には、関係者約300名の出席の下、矢巾キャンパス大堀記念講堂で開会式が執り行われ、シン・ヨンス WHO西太平洋地域事務局長、達増拓也岩手県知事、厚生労働大臣 (代読) の挨拶に続き、小川理事長が東日本大震災津波の犠牲者を慎む黙祷を呼びかけました。

会議では、過去の災害における保健セクター復興活動からの教訓・課題や保健セクター復興のための鍵となる戦略的方向づけなどについて意見交換が行われ、復興への声明がまとめられました。3月6日の会議終了後には、本学による記者会見が行われ、出席した小川理事長、祖父江副学長、坂田教授 (衛生学公衆衛生学講座) が大勢の報道陣の前で会議声明を発表しました。



9大堀記念講堂で行われた開会式
※壇上花は本学華道部が装飾



議長を務めた小川理事長



会議終了後の記者会見 (左から: 坂田教授、小川理事長、祖父江副学長)

理事会報告

■ 1月定例 (1月28日開催)

1. 任期満了に伴う薬学部長の選任について
薬学部分子生物薬学講座 教授 前田 正知 (新任)
(任期 平成25年4月1日から平成28年3月31日まで)
2. 任期満了に伴う附属花巻温泉病院長の選任について
附属花巻温泉病院長 猪又 義男 (再任)
(任期 平成25年4月1日から平成26年3月31日まで)
3. 任期満了に伴う高度救命救急センター長の選任について
医学部救急医学講座 教授 遠藤 重厚 (再任)
(任期 平成25年4月1日から平成27年3月31日まで)
4. 教育職員の人事について
共通教育センター 情報科学科数学分野
教授 江尻 正一 (現 清泉女学院大学専任教授)
(発令年月日 平成25年4月1日付)

- いわて東北メディカル・メガバンク機構 生体情報解析部門
特命教授 清水 厚志 (前 慶應義塾大学専任講師)
(発令年月日 平成25年3月1日付)
- いわて東北メディカル・メガバンク機構 生体情報解析部門
特命准教授 八谷 剛史 (前 慶應義塾大学特任助教)
(発令年月日 平成25年2月1日付)
5. 一般職員の人事について
副薬剤部長 川口 さち子 (現 薬剤長)
副看護部長 三浦 幸枝 (現 中9階看護師長)
副看護部長 安保 弘子 (現 西6A看護師長)
薬剤長 佐藤 文彦 (現 主任薬剤師)
薬剤長 長澤 佳昭 (現 主任薬剤師)
(発令年月日 平成25年4月1日付)

表彰の栄誉

附属花巻温泉病院が 「花巻市活力あるまちづくり表彰2012」を受賞しました

本学附属花巻温泉病院が花巻市の実施する「花巻市活力あるまちづくり表彰2012」を受賞しました。

表彰理由は病院群輪番制運営事業に参加して二次救急医療体制の確保に尽力したこと、花巻市の活力ある町づくりの推進に寄与し、広く他の模範となって活躍したことが評価されたものです。表彰は4部門あり、それぞれの分野で活躍した9名と9団体が受賞しました。附属花巻温泉病院は民生安定部門での受賞でした。

表彰式は2月20日(水)に花巻市内で行われ、猪又病院長が出席し、表彰状を受け取りました。



天然物化学講座 浅野 孝 助教が 「平成24年度日本薬学会生薬天然物部会奨励研究賞」を受賞しました



薬学部天然物化学講座の浅野孝助教が「平成24年度日本薬学会生薬天然物部会奨励研究賞」を受賞し、第19回天然薬物の開発と応用シンポジウム（平成24年11月1～2日、大阪大学）にて、授賞式及び受賞講演が行われました。

この賞は、人類にとって必須な生薬・天然物をより深く理解し有効利用するために、生薬天然物領域の研究を積極的に推進する若手研究者による研究活動の向上に資すべく、優秀な将来性のある研究者に対し贈られるものです。

浅野助教が所属する天然物化学講座では、微生物や植物が化合物を作り出す生合成の仕組みを明らかにし、生物の有する多彩な物質生産遺伝子資源を創薬に生かすという目標に向かって研究を進めています。浅野助教は「薬用植物の培養細胞系におけるアルカロイド成分の生産及び生合成機構に関する研究」という受賞研究テーマのもと、身近に生育している薬用植物を材料に特殊な条件下で誘導した植物培養細胞系を用いることにより、抗がん薬や抗アルツハイマー病薬として重要なアルカロイド成分（カンプトテシン、ガランタミンなど）が簡単かつ大量に得られるシステムの構築、これらアルカロイド成分が植物細胞内で生合成されるメカニズムの遺伝子レベルでの解明に取り組んでいます。この研究の目的は、天然には存在しない新規有用物質を人工的に創り出すことであり、新たな疾病治療薬開発に繋がると共に、貴重な天然医薬資源の持続可能な利用を実現するものとして期待されています。

■ 表紙写真について ■

本号の表紙ページには、学友会の写真部のキャプテン廣瀬仁樹さん（医学部3年）が撮影した写真を掲載いたしました。写真部には医学部、歯学部および薬学部の学生さんが約40名参加し、矢巾キャンパスで楽しく活動しています。写真部の活動はとても活発で2012年は学園祭の展示も含めて4回の写真展を開催し、11月のアイーナギャラリーでの秋季写真展は3日間で約100名以上にご来場頂き大成功でした。

今回は日々、矢巾でキャンパスライフを謳歌している写真部の学生さんに矢巾キャンパスを撮影して頂いたら、きっと若々しい感性による素晴らしい写真が撮影できるのではと期待しておりました。

掲載したのは冬の夕暮れに矢巾キャンパスで撮影された写真です。暮れなすむ冬の夕空に浮かび上がるキャンパスタワー、校舎、植樹の情景の美しさは見事なものです。撮影していただいた廣瀬さん、素晴らしい写真をありがとうございました。

なお写真部が撮影した写真は、矢巾キャンパスのキャンパスモールにも展示されておりますので、機会がございましたら職員の皆様もぜひご覧になってください。（編集委員 佐藤 仁）

— 大学報原稿募集 —

岩手医科大学報は、教職員皆様のコミュニケーションの場として発行を重ねていますが、さらなる教職員同士の“活発な意見交換の場”として原稿を募集しています。

岩手医科大学に対する意見や提言、日々の業務で感じること、随想、作品（写真、俳句、絵画など）、サークル紹介、学報への感想など、様々な内容をお寄せください。（原稿字数 500字～1,000字程度）

また、特集してほしいテーマや、各コーナー（「表彰の栄誉」「トピックス」「教職員レター」など）への掲載依頼などもお待ちしております。事務局までご連絡ください。

連絡先 大学報事務局（企画部企画調整課）
内線7023 kikaku@j.iwate-med.ac.jp

第107回大学報編集委員会

日 時：平成25年3月21日(木) 午後4時～午後5時

出席委員：影山 雄太、松政 正俊、齋野 朝幸、藤本 康之、佐藤 仁、山尾 寿子、昆 由美子、

佐々木 忠司、畠山 正充、鈴木 尚子、武藤 千恵子、野里 三津子

編集後記

あの未曾有の大惨事からはや2年経ちますが、あらゆる面で被災地の復興が進んでいるとは言い難い状況です。そんな中、WHO主催「災害後の保健セクター復興国際会議」が本学矢巾キャンパスで開催されました。この会議が災害における保健セクター復興の起爆剤となることが会議声明として発表されました。被災地医療の中核としての本学の面目躍如といったところでもあります。今後も3.11を風化させず、復興を医療の面から推進していくことが我が母校の使命であると再認識させられる大学報でありました。（編集委員 山崎 健）

岩手医科大学報 第438号

発行年月日 平成25年3月29日

編集 岩手医科大学報編集委員会

事務局 企画部 企画調整課

盛岡市内丸19-1

TEL 019-651-5111 (内線7023)

FAX 019-624-1231

E-mail:kikaku@j.iwate-med.ac.jp

印刷 河北印刷(株) 盛岡市本町通2-8-7

TEL 019-623-4256

E-mail:office@kahoku-ipm.jp

すこやか スポーツ医学講座

No. 45

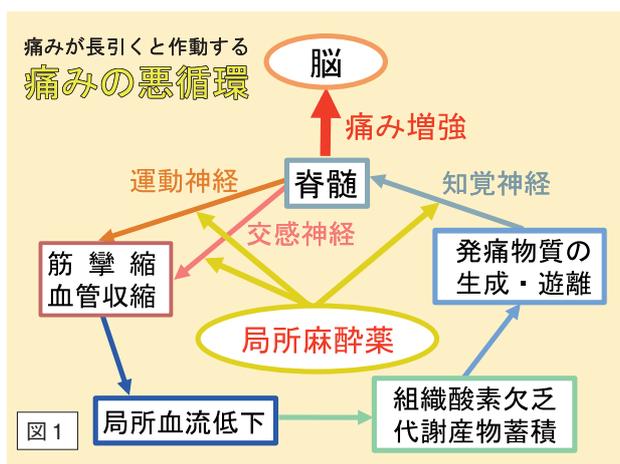
麻酔学講座

講師 水間 謙三



当科の顔面の痛み治療について

感覚の一つである痛みは、痛みを感じる場所から認知する脳までの間に異常があることを知らせています。また、痛みが持続しますと痛みの悪循環（図1）が発生し、血管に伴行する交感神経を興奮させ、神経の支配領域を超えた広い範囲の難治性の痛みに発展し、通常の鎮痛薬では効果が得られ難くなります。なかでも異物が体に最初に接する口腔や顔面は、特に敏感な三叉神経が支配するため、難治性の痛みに発展し易い様です。



初診時の患者さんには、痛みを感じる場所、痛みの種類・性質（持続時間、痛みを誘発する行為、痛みの日内変動など）や、過去の痛み治療に対する痛みの変化など詳しくお聞きします。そして、それを出発点として当科の痛み治療に対する患者さんの痛みの変化を観察します。しかし、患者さんと医師との間では、痛み治療に対する考え方が基本的異なるため、患者さんから痛みの情報を得るには患者さんに負けない根気と熱意が必要です（表1）。

表1 痛み治療時に気付く患者さんと医師の本音

患者さん	治療で消失した痛みはどうでも良い。現在残っている痛みが辛いので、今の痛みを早く無くして欲しい。
医師	施行している痛み治療が的を射ているのかを知りたいので、治療で消失した痛みをさがしたい。

対処した顔面痛は種々あります（表2）が、痛みの治療とその原因探しを並行して行います。

難治性の顔面痛治療には、各種の鎮痛薬内服のほかに局所麻酔薬で知（感）覚神経、運動神経や交感神経を繰り返しブロック（遮断）します（図1）。ブロックは痛むところ（トリガーポイント）や、交感神経が興奮して広範囲に痛みが及んでいる時は頸部交感神経幹の星状神経節（図2）に行います。

表2 難治性の顔面痛として当科に紹介された症例の最終診断名

1. 三叉神経痛
特発性（原因が三叉神経に血管が接触しているもの）
症候性（原因が腫瘍、事故、歯科のインプラント治療や抜歯）
2. 顎関節症
（外傷によるものも含む）
3. 歯痛
4. 筋緊張性頭痛
5. 帯状疱疹後神経痛
6. 上顎洞炎
7. 舌咽神経痛
8. 悪性腫瘍



図2 左は、造影剤入りの局所麻酔薬を注入する星状神経節ブロック（SGB）直前の写真で、右はSGB終了後の写真です。

三叉神経痛や顎関節症の症例の中には歯牙が痛みの原因と診断され、抜歯されているものもあり、私達のペインクリニック術の啓発不足と同時に、歯科領域が含まれる顔面の痛み治療には歯科医師の協力が必須である事を痛感しています。